

平成23年度 東京都市監査委員会

第2回委員研修会

都市政策と監査活動の使命

～監査が未来を創る・監査は未来に評価される～

東京都市監査委員会

平成24年1月18日（水）

於 清瀬市生涯学習センター アミューホール

## 都市政策と監査活動の使命 ～監査が未来を創る・監査は未来に評価される～

講 師

NPO法人 地域と行政を支える技術フォーラム

理事長 原田 敬美 氏

皆様、こんにちは。ご紹介を賜りました技術フォーラムの理事長を務めます原田でございます。前港区長でございます。どうぞよろしく願いいたします。今日は、まずこういった講演会の講師としてお招きいただきましたことを御礼申し上げます。ありがとうございます。大変名誉なことと感じております。

今日は60分ぐらいお話をさせていただいて、10分程度、休憩をしていただいて、また40分ぐらい後半のお話をさせていただいて、そして10分ぐらい質疑応答という形の進行で進めさせていただきたいと思っております。適当なところで、私のほうで小休止をさせていただきます。

今日の資料は、先ほどご案内がありましたけれども、パワーポイントの資料のコピーとレジュメと2セットございます。パワーポイントは全体像をつかんでいただくことで、前のスクリーンを見てお話を聞いていただきます。このスクリーンの映像だけですと何のこともよくわからないこともありますので、その裏づけになるいろいろな具体的な証拠資料等をレジュメにつけておりますので、スクリーンとレジュメとの両方を見比べていただいて、聞いていただけたらと思います。

今回の経過と申しますか、お話をさせていただきますけれども、波澄局長から、今日は冬の寒い時期ですが、夏の結構暑い時期だったと思うのですが、こういう研修会があるので講師をやっただけないかというご要請のお電話をいただきました。「わかりました。いいですよ。今自分もそういったことの、特に工事監査に絡むお仕事をさせていただいております」と。どういう内容にしましょうか、単に工事監査ということであまり専門的過ぎてもいけないし、監査委員の先生方もいろいろ幅の広い方がいらっしゃるのでと、波澄

局長さんといろいろ会話をしながら、例えば私は今日おそらくお見えの先生方がご存じでないというか、あまり情報を持っていない1975年のニューヨーク市の財政破綻の話ですとか。それから私は設計者でありますけれども、建設業界のいろいろな不祥事の問題や工事監査の話などはどうですかねという話を申し上げました。そうしたら波澄局長から、最近、震災のこともあるし、災害の話とか監査の話なども加えてほしいとか、いろいろリクエストがありました。ですから今日のお話のコンテンツは実はほとんど波澄局長からのリクエストでございます。

今日お話しさせていただく内容は、おそらく大学だったら1年間講義として続けるような中身になるのですが、それを1時間半ぐらいに凝縮してお話をさせていただくということです。話すほうもつらいのですが、聞いていただく側もいろいろな話となり分野が飛びますので、いささか支離滅裂なことになります。いろいろ社会経験あるいは専門的なご経験を踏んでいらっしゃる皆様でございますので、私のつたない話ですけれども、それなりにご理解いただけたらと思います。

もう1点、これは全くプライベートな話ですが、私は都心住まいが長く、小・中も都心だったのですが、実はそういえばということで、これは50年近く前の生徒手帳なのですが、私は高校は国立にある桐朋学園の卒業です。たまたま引き出しの中に昔の生徒手帳がありまして、懐かしいな、昭和41年は高校3年生だったのですが、そういえばこんなことがあったのだなと国立のことを思い出しました。とにかく都心から国立に来ましてびっくりしたのは、まず学校が、校庭が広い。それから土のグラウンドである。緑が多く、すばらしいところだなと。当時の東京の郊外、多摩地域全体がすばらしい町だなと。よく遠足でいろいろな地域へ生徒として学校の行事で行きまして、多摩地区の美しさに非常に感銘して、こういう場所で勉強できたら、さぞすばらしいなという思いで、3年間多摩地区といえますか、国立の場所で過ごすことができました。私にとっては、そういう意味ではすばらしい環境の場所という思い出の深いところでございます。

前置きが長いのですが、私は経歴書にも一部書いてありますけれども、何で建築の専門家が突然区長になったのですかという質問を今でも受けます。私は三十過ぎの年に、今から4代前になりますがたまたま当時の区長のブレーンを頼られました。役所はご存じのように、気に入られるとまた翌年もとずっと頼まれて、直前の区長のときには4つも5つも港区のいろいろな審議会の会長とか研究会の会長などを頼られました。要は自分で港区のある部分ですが政策立案をやって区長に出す仕事を、ボランティアですけれどもやっ

たわけです。

それで突然、前の区長が病気で倒れて、次はだれが区長をやるのかな、またお手伝いするのかなと思っていたら、区長から電話がかかってきて、ちょっと来てくれと言うから、また何か審議会の会長でもやってくれと言われるのかなと思ったら、要は急に後継者で出してくれという話になりました。それは2000年、平成12年でした。私は実は2001年に大学の教授のポストが決まっているのですということで、自分の将来が決まっているから、失礼ながら政治には関心もありませんし、専門家としてお手伝いをするのは喜んでやりますけれども、自分がそういう立場に立つのは私としては関心がありませんとお断わりをしたのです。しかし、どうしてもやってくれと、選挙の1カ月前だということもあって、周りからやってくれということで、急に大学の教授のポストを自分でキャンセルしまして、その時も大学にわざわざお詫びをして、もう決まっていた人事で、実はこういうことになってしまったのでと、社会貢献だからしょうがないですねということでお許しをいただいて、内定人事を取り消していただいて、区長に就任させていただいたということです。

前置きが長くて恐縮ですけれども、なぜ監査に関心を持ったかということです。あるいは監査の必要性、監査の重要性を痛感した、区長の立場でなんですが、幾つか例があるのです。2つの例をご紹介します。区長に就任しまして、一番大変だったのは行財政、特に財政改革です。財政再建が一番大きなテーマだったのですが、そのときに前の区長が既に発注していた工事案件がございまして、建築設計家として、設計の中身も大事ですが、積算が何となく気になって、港区の場合は営繕課長ではなく施設課長という名称なんです、施設課長に命じて積算書を持ってこいと言ったのです。それで私がプロ意識というのがあって、チェックをして2件あったのです。

私のときは、財政再建の関係で工事は一切やらなかったのです。自分ではやりたかったのですが、財政上の理由でやらなかったのですけれども、その積算を2つチェックしていたら、ちょっとおかしいなと言って、あれやこれや自分でチェックを入れまして、施設課長に、これはおかしいと。1つはトータルで3,000万ぐらいですか、減らせと命じました。1つは今日お配りした資料の最後に出ていますが、30億の見積りの案件は、どう考えてもおかしいと。私は施設課長を呼びつけて、5億減らせと指示を出したのです。

このときに、やはり区長が直接そういう指示をしたことに対して、ある種の衝撃が走ったわけです。私はそのときに監査委員が、もちろん私の知っている方だったわけですが、

この工事の案件の積算書をいろいろ問題があるということで審査意見書を私に持ってきてくれれば、私も施設課長に監査委員がこう言っているからよく検討してみろということでワンクッション置いて、私がストレートに命令するよりももっとソフトに話が進んだのではないかなという思いがあったのです。就任して早々のことでしたから。

いろいろな例があるのですが、2つだけお話しします。もう1つは、これも言い方を間違えると誤解を生むことになるのですけれども、小学校の統廃合、廃校です。飯倉という小学校は生徒数が25名です。教職員、先生の数が42名です。皆さんの市も同じだと思うのですが、小学校の1人当たりの生徒の経費が年間約80万です。その飯倉小学校だけは先生が42人で生徒が25人ですから、当然、経費がものすごくかかる。1人当たり400万円以上かかっているわけです。これも今だから率直に言えるわけですが、前の区長も教育長も議員たちも、こちらには議員の先生がたくさんいらっしゃる、お立場はよくわかりますが、やはり廃校するといろいろな問題が起こると怖がって、誰もやらなかったのです。どんどん生徒数が減ってくるのに。これはやはりおかしいよと。それで私のときに廃校にしましょうよということでやりました。

そうしたらマスコミは本当にひどいなと思うのですが、子供にテレビカメラで撮影しながらマイクを向けて、「この学校は廃校になるんだけど、君はどう思う」なんてインタビューするわけです。そうすると当然、「僕のクラスは5人で、先生が2人いて、こんなに素晴らしい小学校はありません」なんて、子供はすごく自然ですから言うわけです。それが全国放送で流されるわけです。そうすると北海道とか九州とか関係ない視聴者から私のところにファックスに、「港区長、あなたは冷たい人だ、死ね」なんて流れてくるわけです。

監査委員の先生方だって、どう考えたって25人の生徒で42人の教職員がいて、1人当たりの経費が普通は80万なのが400万以上というのはおかしいと、普通だったら感じますよね。そのときも監査委員が私にその学校の今の状況はおかしいぞと、こんなに経費がかかっているのはおかしいぞと審査意見で言ってくれば、教育長や議会の関係者を呼んで、監査委員がこう言っているではないか、やはり廃校しなければだめだということで、ワンクッション置いて廃校の手続ができたなど。ものすごい反対運動に巻き込まれたわけです。それはもちろん承知の上でやったわけですから。

そういうことで監査はとにかく大事で、もっと監査委員の先生が積極的に私に意見を出してくれないと、ちょっと身が持たないなという思いがありまして、それで私はもともと

政治家志向ではございませんので、財政再建等が終わって1期でやめさせていただいたのです。そういう思いで、やはり市長とか行政とか、あるいは監査委員の先生方のお役に立つ仕事をボランティアですがやってみようと、特に技術の分野でやる価値があるのではないかという思いを持ちまして、この技術フォーラムという組織をNPOとして立ち上げて、特に工事監査を中心に技術にかかわる分野のコンサルティングのお手伝いをさせていただいています。

大変前置きが長くなったのですが、まず監査は本当に大事だと。市長を支える、行政を支える上で大変大事だと、もっと積極的に動いていいのではないかという思いを持ったことが、きっかけだということでございます。

すみません。前のほうの照明を消していただけますか。順番にパワーポイントで、時間のことがありますので走りながら行きますが、まず社会経済の変化の動態の相ということで、国であれ、地域であれ、行政であれ、企業であれ、個人であれ、この1つのサイクルだと象徴的に言えるのではないかと思うのです。どこからでもいいですけども、例えば絶頂期。絶頂期があれば必ず下がる。だめになる。また頑張ろうと。いつもこの循環だと思うのです。行政も同じことだと思うのです。税収がどんどん増えて、公共工事をばんばんやっちゃえと。だんだん公共工事の負担に耐えられなくなって、税収も下がって、おかしいと。最後に、財政再建が必要だとなるのです。また税収が増えて景気がよくなると、どんどんもうかっているから、公共工事をやっちゃえと。これの繰り返しです。

だから、どこの層のときに例えば市長がどういう仕事をするか、私のときはちょうどこのあたりでしたか、区長に就任したときはこのぐらいでしたが、今はこうですね。今私が言ったように、今の区長はボンボン公共工事をやっているのです。理由はあると思いますが。それで結局どこの相のときにどういう仕事をするか。例えば監査なら監査としてどういうスタンスで監査をするかが、私は非常に大事だと。ですからどこのステージにあるか、どこの相に今の組織があるのかをしっかりと見きわめる必要があると思います。

昔の外国の話なのであまり知らない方のほうが多いのではないかと思います。事例1として、自治体の財政破綻。ニューヨークと夕張のお話をさせていただきます。レジュメは1ページ目から2ページ目にこのことが細かく書いてありますし、あと参考資料にも出ております。先生方はびっくりされると思いますが、実はニューヨーク市は1975年に財政破綻しているのです。破産しているのです。今でも管財人が裏で動いています。当時リンゼイさんという白人の若いハンサムな市長がいたのですが、大変な人気だったので

す。黒人にも好かれるという人気の市長さんだったのですが、結果的には人気通りの政策の問題と、それから2番目、社会経済の先ほどの循環の絵を見ていただきましたが、社会経済の変化に気づかず対応できなかった。そして監査委員は何していたのかと。

1975年の財政破綻の後、15年後、1990年にどういうことになったか。15年たったときのニューヨーク市の殺人被害者は2,200人という大変な数に上ったということです。

これはニューヨークタイムズの1年ぐらい前のものからの引用ですが、ニューヨーク市における殺人被害者の推移です。さっき75年に財政破綻していると。このときだって、そこそこ、東京で殺人事件というと大問題で新聞に出ますけれども、年間でこれだけ死んでいるのだから1日に四、五人殺されているということです。それで結局、財政破綻で何をしたかということ、警察官の数をワッと減らしたわけです。日本と警察制度が違ってアメリカの場合は自治体警察制度ですから、警察官も市の職員なのですね。市役所の中に警察部というのがあって、市長が警察を指揮するのがアメリカの警察なのです。もちろんほかの例えば連邦警察などまた違う部門もありますけれども、基本的には自治体警察です。そうすると、財政破綻ですから警察官を1,000人、2,000人とどんどん首を切ったわけです。首を切っていったあげくの果てに、15年たって1990年、2,245人、つまり1日当たり6人殺される事態になったということです。

要はリンゼイさんが何をやったかということ、例えばニューヨーク市立大学、東京で言えば都立大学みたいなものですが、今は名前が変わりましたが、市立大学が現在でもあります。1970年に私はアメリカにいて、75年にもアメリカにいたわけですが、その頃の大学の授業料が約2,000ドル、交換レートが1ドル360円ですから、当時で約72万円。学生数26万人が無料だったのです。貧しい層の例えば黒人層からすれば、市立大学は授業料が無料だと言ったら、市長はすばらしい人だということですね。26万人が2,000ドルですから合計すると約2,000億。今だと5倍ぐらいの貨幣価値だから1兆円です。市立大学の授業料は無償ですから1兆円ずつ税金で補てんをしていたのです。それで黒人層から圧倒的な支援、支持があったのですが、結果的には人気とりで、お金を垂れ流し、市立病院もある意味で非常に充実させて、経済的に困っている方もどうぞという形で、それはものすごく人気が出ますよね。

だけど結果的には彼がやめた後、ニューヨーク市は財政難に。1975年5月でした。私は当時アメリカにいましたので、テレビでニューヨーク市がデフォルトのころ、建築の

学生ですから、ニューヨークシティーがつぶれるという意味が当時は全然わからなかったですね。今になっていろいろ当時の文献を読んだりすると、なるほど、こういうことだったのかということがわかるわけです。そういうことで大騒ぎになったのですね。

皆さんご記憶にあると思うのですが、当時フォード大統領がいて、日本と違って地方自治は言ってみれば完全地方自治で、連邦政府は一切口出ししません。お金の援助もしません。ですから市のことは全部市でやる。さっき言ったように警察も含めてです。税金も自分たちで税率を考えなさいというのがアメリカの地方自治ですから、そうすると国からの援助は一切基本的にありません。地方債、つまり借金を重ねてリンゼイさんはサービスをやってたわけです。大学はただです、病院も安いですよとやってたわけです。それは全部借金の裏づけでやってたのですが、その借金を返す、つまり次の市長さんが今度は借金を返したのです。実は私がまさに同じ立場だったのですけれども。つまり税金がバブル崩壊後減ってしまって、サービス水準を維持しなければいけない。ですから借金、借金で、地方債をどんどん発行して、私が区長に就任したときにその地方債の返還で、自分がやるのはニューヨークと全く同じだなと思うようになったのです。次のビーム市長が地方債の償還期を迎えるときに金庫を開けたら空っぽだったと。深夜に当時のフォード大統領に直接電話を入れたのです。「明日、今のままだとニューヨーク市はつぶれます。大統領、何とかしてくれ」と。大統領は「ニューヨークのことはニューヨークが自分でやれ」とガチャンと切ってしまったのですね。それでデフォルト宣言をして、ニューヨークはもうつぶれたということだったのです。

そのようなことがあってどんどん悪化して、悪い結果が15年後ぐらいにあらわれた。その後、また有名な話ですが、ジュリアーニという検事上がりの市長があらわれて、赤信号を渡っても逮捕する、地下鉄無賃乗車をやっても逮捕する、全部逮捕で凶悪事件を減らして行って、2009年で461まで減った。つまり1962年の数字に戻りましたと、よかったよかったと当時の新聞記事、2009年12月に書かれて、面白い記事だなということで私はファイルしておいたのですが、そういうことなのです。

では、スケールも財政規模も知名度も違う夕張のことをお話しさせていただきます。夕張は2007年に破綻をしました。人口規模1万。ニューヨークは800万、世界のナンバーワンの市で、夕張は失礼ながら世界から見たら「そんな町、どこにあるのですか」みたいなものですね。ところが財政破綻はニューヨーク市と全く同じパターンです。まず不適切な市政と決算、まずこれは……。



ニューヨークのことをもう1つ言い忘れました。時代背景を見誤ったということです。私はヒューストンの大学を選んで留学をしたのですが、なぜかというと、現在もそうですが、当時はサンベルトということで南部がずっと景気がよくて、ヒューストンが百何十萬都市です。今は200万で、全米で第4位の都市です。私のときも第4の都市になったのですが、非常に人口が増えて、都市計画とか建築を勉強するにはちょうどいいだろうと。ニューヨークからどんどん会社がヒューストンに移って、ニューヨークの税収が減りということもあったわけです。つまりエネルギーとか産業、宇宙産業など、産業形態が変わっていった。ニューヨーク市はそれを理解していなかったということなのです。だから産業政策を誤ったというのがあります。

夕張も全く同じです。石炭から石油というエネルギーの社会背景が変わったのにもかかわらず、それに脱皮できない。そして撤退する石炭企業から、例えば社宅である炭鉱住宅を市が買い取ってくれと。炭鉱会社が整備したインフラ、下水・上水、全部市で買い取ってくれ、病院を買い取ってくれとやっていったわけです。いいよいいよで買っていった。しかもその買い取り値段が当時の資料を読むと、本当にその値段だったのか、相当高い金で買い取ったのではないかと出ています。そういうときも監査委員の方が、買い取り価格が適正であったかどうかの監査意見書を出したのかどうかですね。これは積極的に打って出ようとしたのですが、観光事業に失敗した。失敗した借金の隠ぺいをやったわけです。借金をつけかえるということで、監査委員が帳簿をちゃんと見ていたのかどうかです。それから社会構造の変化に対応できずというのは、今言いましたように石炭から石油へという時代、避けて通れない時代の動きですが、それに対してきちっと対応しなかったことで、これもニューヨーク市と全く同じパターンです。

ですから大都市であれ小都市であれ、そういう社会の構造の変化に対応できない、対応の判断を誤る。それから、こういういい加減な財政運営をする。あと事業ですね、政策。積極的に打って出たこと自体は高く評価するのですが、結果論として身の丈に合っていない事業をしてしまったことだと思ふのです。そういうことで、全く原因・背景は同じということです。それで市長さんの人気とりですね。今お話ししたことを整理すると、ニューヨーク市と夕張市の財政破綻の原因・背景は、社会経済の変化の判断ミスと、市長個人の人気とり政策の間、監査委員の監査活動に結果論ですが効果がなかった。監査委員がどうだったかは、私は知りませんが、結果的にはそうだったということです。

次に、今度は企業といえますか、地方自治体から国営企業のお話をさせていただきます。

事例2として大企業の財政破綻で、国鉄と日本航空のお話をさせていただきます。これはレジュメの3ページ、4ページあたりに書いてありますので、そちらを見ていただきながらと思います。まず2-1、国鉄です。経過を言いますと、1970年代に赤字の累積が始まったということです。今ちょっと1つ先に移りますと、悪化する国鉄、電電には今日は触れませんが、収支率ということで、昭和30年代後半でプラスから赤字に転落して、それからずっと赤字が続いてきているわけです。76年の日経新聞から探し出したのですが、古いデータを見ると非常にとんでもない状況だったことがわかるわけです。

後で日本航空のお話もさせていただきますけれども、レジュメに書いてあるこの20年ぐらいの間のマスコミの動きを見ると、70年代の後半あたりはマスコミの論調は、私は3段階論法で申し上げますと、まず国鉄、日本航空も同じですが、「経営上、問題あるぞ」と新聞などに出るわけです。「けどまだ再建はできる」と書いてあるのです。しばらく行くと「再建はもうだめだ」となるわけです。3段階目、3回目には今度は「民営化でしっかり再建せよ」と、日本航空も全く同じパターンです。70年代のいろいろな新聞などを見ますと、「まだまだ頑張れ、しっかりやれ」と書いてあるのですが、今グラフで見ていただいたように、70年代からどんどん赤字が増えている。社会の変化に対応できなかった、高コスト、親方日の丸体質、職場規律の問題と。これは日本航空も全く同じです。

後で民営化のお話をさせていただきたいと思っているのですが、少し資料を見ていただきたいと思います。今お話したように、昔の資料を引っ張り出しまして、こんな図があったので、これはわかりやすいなと思いましたが、昭和38年ぐらいのところまでゼロになって、後はどんどん赤字が増えていくというパターンになっているのです。国鉄もまず1つは時代を見誤ったというのがあります。これはやはり古い日経新聞から探し出したグラフですが、今はもう皆さん、宅急便などいろいろ民間の貨物の輸送などを使っていらっしゃると思いますが、モータリゼーション、70年代、自家用車が、車の生産が増えて、個人で移動する。それから宅急便ができたのが、たしか70年代後半か80年ぐらいで、輸送の形態がもう変わっている。車は増える。輸送の形態は変わっている。だけど国鉄は貨物の形態が変わっているのにもかかわらず、時代の変化をきちっと分析できないで、国鉄は40年、45年、51年とこのような推移です。これは運輸白書からとっているわけですが、当時のですね。それで乗用車はこんなに増えているわけです。この時代、トヨタとかマツダとか本田だとか日産、日産も一度会社がつぶれかかったというかだめになりましたけれども、今また盛り返していますが、要は40年から比べると乗用車がこん

なになっているわけです。そういうことで、交通量の全体の中で見ると国鉄の比率がどんどん下がってきてしまっているのです。こういう言い方はどうかと思いますが、親方日の丸でおれたちは天下の国鉄だと、おれたちが貨物を担っているんだという意識の中にいたにもかかわらず、実際はもう個人あるいは会社がどんどんやるようになっていたわけです。もちろん運輸白書に出ているぐらいですから、理屈の上ではわかっているのだけれども、意識の中では、おれたちが貨物を担っているんだという意識だけは持ち続けていたということでした。

これは先ほどの10年後の資料で、毎日新聞の資料がたまたまあったわけですが、今度は長期債務です。37兆です。国の借金とか国の年間予算が幾らとか言われていますけれども、国鉄という一組織だけで長期債務が37兆円まで膨れ上がってしまったわけです。これですね。最初は「ちょっと赤字になりましたね。ちょっと頑張って何とか黒字にしましょう」なんてやっているうちに、どんどん赤字が累積化して、「いいや、借金して何とか頑張れば取り戻せるよ」みたいなですね。86年ですから、その後、さっきの年から10年から10数年たった後、長期債務が37兆円。これはどう考えたって返せるような数字ではないです。このうち国民負担が14兆もあるということです。その他いろいろこれだけのものがあるということで、今でも国鉄清算事業団が存在して、借金を背負いながら借金をちょっとずつ返そうと。それでも、正確な数字を覚えていませんが10何兆円、国鉄清算事業団が負債を抱えていて、言ってみれば国民1人1人が、皆様が負担をしている状態です。そのような状態ですと今日まで来ているということです。

JRとして民営化して立て直したということですが、後でまた総括で出てきますが、もう1つは労働問題ということが言えるわけです。皆様が国鉄のときにどのような体験があるかわかりませんが、今は指定券なんかを買うとき、みどりの窓口なんかは非常に親切に対応していただいています。例えば旧国鉄時代、私が実際に体験したことで、指定券を買いに行こうとすると、お客さんがたくさん並んでいるのに窓口が1つか2つしかあいていないとか、客がワーッと行列して、カウンターの奥で職員が何人かいるのに対応してくれなくて、結構並ばせているような状態がありました。

これは週刊誌のグラビアに30年ぐらいに出ていましたけれども、総武線の運転手が、あんパンをかじりながら電車を運転していたと。要するに職場規律が非常に乱れていたという週刊誌の告発とグラビアがありましたけれども、非常に態度が悪い。帽子をこんなに不良少年がかぶるみたいな感じでかぶって運転する。あるいはとっくりのセーターを着て

運転をしているとか、そんなことを目撃したことがあります。私なんかの服装感覚からすると、不良少年がそのまま国鉄の社員になって運転をしているのではないかという印象を持ったのは事実です。おそらく皆さんも同じような体験をされた、あるいは目撃された方もいらっしゃるだろうと思いますけれども、こんなに経営がひどい状態だったので、職場は職場で乱れていたということです。

次に日本航空。昨日もニュースがございましたし、つい最近のことですけれども、全く国鉄と同じパターンです。90年代ぐらいに「日本航空は財政、経営がおかしいぞ」と。「今ならまだ間に合う」と最初の頃の新聞には出ているのですけれども、しばらくすると「もう財政再建は間に合わない。民営化でしっかりやれ」という3段階論法で、新聞の流れがあるわけです。80年代、90年代、社会の変化に対応できなかった。これもニューヨーク市、夕張市、国鉄と全く同じです。それから高コスト、親方日の丸体質、職場規律の問題も、全く同じです。それで2009年に破綻したわけですけれども、レジメに書きましたが、日本航空の実態ということで、たまたまですが、日本航空のある幹部でもう退職した事務部門の方ですが、彼の話を知ると、バランスシート上、日本航空が一番よかったのは70年代の頭だったのです。だから国鉄と全く同じです。やはり成績優良だと、みんながあれもやろうこれもやろうと、ワーンと大ぶろしきで広がっていつてしまうわけです。大きな気分になってということです。

それからさっき私は桐朋学園の卒業生だと自己紹介させていただきましたが、私の同級生で日本航空のパイロットになった人がいるのです。彼はどうしたものか桐朋から大阪大学を受験しまして、機械工学に入って、卒業したら日本航空のパイロットになったということで、これは彼の証言です。彼は国際線のパイロットだったのですが、勤務時間は週1回です。ハイヤー通勤です。家から当時ですから羽田までハイヤーで送りがある。羽田へ戻ってくると自宅までハイヤーで帰してくれる。週1回ですから、残る日は暇なわけです。昼間からおれはサウナに行くんだと言っているのですね。サウナへ行くと入れ墨をした怪しいお兄ちゃんばかりいる。そんな中でおれはサウナに入っているのだという話を、彼から直接聞いたことがあります。

それから私は、経歴にも書いてありますけれども、69年から70年の1年間、母校は早稲田大学ですが、交換留学生でアメリカに1年行っておりました。大学3年生のときでしたが、とにかく冒険心が強かったというのでしょうか、ひょっとして区長になったのも冒険心が強いゆえかもしれません。そのときの1年先輩の女性の方ですが、卒業してから

ルフトハンザに就職しまして、長くいて、今早稲田の同窓会のニューズレターの編集長が何かをやっていますが、航空問題になるとよくマスコミからインタビューを受けるような存在でした。彼女から直接聞いたのですが、「スチュワーデスの仕事は大変だと日本航空の人たちが言っているけれども、あれはうそよ。こんな楽な仕事はないわよ」と私には言うわけです。だから既得権で高い俸禄をむさぼっていたということだと思ふのです。

今ちょっと私の友人のパイロットのお話やらスチュワーデス、今はキャビンアテンダントというのですか、お話をさせていただきましたけれども、この間、日本航空がつぶれて転職を余儀なくされたパイロットのインタビューがNHKで放送されていました。数カ月前です。ごらんになった方もいると思います。彼は日本航空を、退職を余儀なくされてとか自主退職したのか、その後トルコ航空に就職したのです。トルコ航空のパイロットになった。日本航空のときには年収が3,000万以上で、週1回しか乗務しなかった。今度トルコ航空に入ったら年収1,000万、週3日乗務する。1,000万で週3日乗務するのが世界のパイロットの常識なのです。日本航空だけが週1回で3,000万、4,000万、しかも自宅と空港の間をハイヤー通勤するという、殿様商売とか大名商売をパイロットがやっている。それから賃金ストを平気でやる。4,000万もらっている方がストをやるわけです。スチュワーデスも大体、30ちょっと40ぐらいで年収1,000万になる。これも年収1,000万の方が堂々とストをやる。組合が8つあるということで、完全に労務問題、親方日の丸でやっている。

もうつぶれるのは当たり前ですよ。つまりトルコ航空のように年収1,000万で週3日乗務するのが世界の常識なのに、給料は3倍以上もらっていて、職務はその3分の1であると。掛ける3分の1で給料は3倍ですから、世界の水準の9倍日本航空のパイロットはもらっているということです。その他ハイヤー通勤など附属のメリットを入れると、大変な金額になる。何かいろいろ労務対策に手を打とうとすると、ストをやる。平気で賃上げのストをやったりするということが、ずっと続いていたわけです。日本のお客さんたちはおとなしいから、あまり怒りをスチュワーデスやパイロットにぶつけないで社長にぶつける。それは筋違いで、社長にぶつけてもだめで、例えばこれは98年の毎日新聞の資料にあるのですが、病院長が58歳で月給が平均で150万。機長は172万。副操縦士が35歳で120万なのです。当時の統計によりますと。そのような状態だということです。

世界の常識とさっき申し上げましたが、私はたまたまアメリカへ出張で行ったときに、

90年5月、コンチネンタル航空の機内誌に出ていたのですが、日本ではキャビンアテンダントといますが、英語ではフライトアテンダントと書いてあります。これはレジュメを見ていただきたいのですが、クオリフィケーション、資格は、客商売なので年齢は少なくとも20歳以上とか、高校卒業以上とか、それから身長が出ていますね。ウィズアウト・シューズ、靴なしで身長はこのぐらい。それから体重のことは正確に書いてありませんね。身長に見合う体重という表現になっています。ウェートはですね。あと視力は日本と単位が違うのですが。コンチネンタルで。ポイントはここです。14ドルと書いてあるのです。パー・フライト・アワー、つまり乗務時間1時間に対して時給14ドル。だから単純に100円とすると時給1,400円です。これが世界の常識です。

ですから年収1,000万取って、会社が1,000万払ったら、会社がつぶれるのは当たり前ですよ。こういうのはみんなわかっているわけです。わかっているのに賃上げストをするとか、パイロットみたいに3,000万、4,000万もらっていても賃上げストを平気でやる。乗客不在でやっている。別に私は日本航空のパイロットやスチュワーデスに個人的に恨みつらみがあるわけではないけれども、あの人たちは我々に笑顔で接するわけです。それは客商売ですから。ところが腹の中では「私たちはお前たちからこっそり金を取るんだぞ」みたいな、そのような銭ゲバという言葉は悪いですけども、結果的にはそのような連中だったのだと思います。これはもう世界の常識だということです。

それで国鉄と日本航空の破綻の原因。これは実はニューヨークも夕張も根本は同じことです。総括としてお話をさせていただくと、まずトップの人気とり、国鉄の総裁、日本航空の社長、当時は運輸省からの天下りです。無事に2年か3年、総裁、社長業をやって、めでたくまた次にどこかへ天下って、70歳になったら叙勲で勲章をいただいて静かに人生を送りたい。普通の人はそう思うわけだから、わからんでもないですけども、自分は労働組合とけんかをしたくないということで、社員と仲よくしましょうという人気とり。これはリンゼイさんも夕張の市長も全く同じです。嫌われたくない。だからもうアンタッチャブルで、そういうことに手をつけない。労組員の身勝手ということで、世界の常識から離れた、あるいははっきり言って能力にふさわしくない、とんでもない賃金をもらって平気である。

実は私の同級生が日本航空の外人スチュワーデスを導入するときの労務担当の責任者をやっていて、彼は非常につらい立場で、やはり私の留学の仲間ですけども、日本航空へ就職して彼は労務対策を一生懸命やっていたんですが、外国人スチュワーデスを入れると

チームワークが乱れるから、外人スチュワーデス反対とか、それでストをやるわけです。それから緊急時、外国人のスチュワーデスがいるとチームワークが乱れて緊急対応できませんと。ほかの外国の航空機はみんな外国人を入れているわけです。例えばエールフランスだってアメリカン航空だって、日本人の客を相手に日本人のキャビンアテンダントを入れているわけです。そうやって、言ってみれば、へ理屈を言いながら外国人スチュワーデスの導入の反対をする。それからアルバイトスチュワーデスの導入を反対するということで、既得権を守る。そのために平気で我々の移動の迷惑も考えないでストをするということです。

それから社会の動向を把握、認識できなかったということで、今、格安航空なんかワッと出ていますよね。ああいう動きとか、世界の賃金相場ですよ。大体今言いましたように、アメリカあるいはトルコのパイロットも年収1,000万ちょっとくらいが世界の常識ですから、そういったこととか、あるいは格安航空券、ディスカウントチケットがどんどん出ていることを認識はしていたけれども、見て見ないふりをして、そういう動きを無視していた。そのときに監査役が、非常に高い人件費とか非効率とか労働問題に対し何をしていたのかなということです。

レジュメの3ページ、4ページ目の国鉄のところを見ていただくと、国鉄の2-1-1の経過の次のページに、実際に1978年の8月に、当時の高木総裁が、たしか高木さんはその後、横浜市長か何かになったと記憶しておりますが、昭和52年の決算と監査報告書が出まして、監査報告書で、「輸送実績が前年度より落ち込んだことを重視すべき、合理化を図るべき、国鉄の存立の危機という意識を持って、一段と厳しい経営姿勢を堅持せよ、労使が過去のいきさつにとらわれず」ということで、監査意見が出ているのですが、結果的にはこれが有効に使われなかった。それなりに監査役の方も頑張っただけで監査報告書を出していたのでしようけれども、実際現場ではなかなかそこまでいかなかったということです。

日本航空も公的資金、昨日のニュースでしたか、今朝でしたか、1,000億なのか2,000億なのか数字は忘れちゃったけれども、要は私たちのお金ですよ。公的資金ですから。あの会社が保っているのは、延命しているのは、我々の税金であの人たちがもっているわけです。90年代のゼネコンの倒産でも、随分公的資金を投入して生き延びた会社もありますけれども、結局こういう国民には直接関係ないというか組織の中の問題のせいで、私たちが非常に彼らのしりぬぐいをさせられているところがあって、会社がつぶれたり不祥

事があつたりすると社長さんやら責任者の方が90度に腰を曲げて「謝罪を申し上げます」とマスコミの前でやるわけですが、私も何回もさせられましたが、ただそのときに私がいつも不思議に思うのは、皆様に対する当てつけでも何でもないので、監査役と監査委員は何をやっていたんだと。こういういろいろな問題に多分気がついてはいるはずだけれども、もっと積極的に介入していいのではないかと、介入すべきだったのではないかと。下手をすると社長やら首長なんかよりも監査委員の責任のほうが重いのではないかと私は思っております。それはまた皆様のというか、監査委員のお仕事の重要性との裏返しであるわけですが、そのぐらい重要なお仕事を皆様はされていらっしゃるということです。

こういう国鉄とか日本航空、日本航空はまさに今財政破綻で公的資金を投入している現在進行形のところでございます。まだまだしばらくこの1年ぐらいはニュースに相当出てくるとお思いますので、ウオッチして皆様のお仕事と並行して比べていただいたら、監査委員がこんなところを本当はやらなければいけなかったのだなというところがあるのではないかと思います。

大体今60分たちました。ちょうど話の区切りがいいので、ここで10分間休憩をさせていただきます。3時10分からまたお話を続けさせていただきます。また後ほど、よろしくお願いたします。とりあえずはこれで中断をさせていただきます。ありがとうございました。

( 休 憩 )

それでは再開させていただきます。よろしゅうございますか。

国鉄、日本航空のお話をさせていただいたのですが、ちなみに2年前か、報道によりますと、日本航空の負債総額が2兆3,000億で過去最大の破綻である。会社自体大きいからというのがあるのですが、レジュメの5ページ、2-2-2にそれを書いておきましたけれども、こういうところまで行く間に、監査役は何をやっていたのかなと私は感じるのです。

次の話題に移させていただきます。また別の切り口でちょっと暗い話題になるのですが、昔あるいは比較的最近、話題になった首長の不祥事ということで、建設産業のお話をさせていただきます。事例3、首長の不祥事、建設談合で、93年にゼネコン汚職ということで、仙台市長、宮城県知事、茨城県知事その他何人かの政治家が逮捕された事件がありました。93年7月ですか、一斉にいろいろな方が逮捕されて私もびっくりしたのですが、



私は実は89年に仙台市のあるプロジェクトを頼まれまして、研究会で市長もお見えになってごあいさつして、その後の懇親会で市長とも、石井さんという方でしたが、お話をさせていただいて、非常に東北の素朴な感じのおじいさんというか、そのぐらいの年端の方でしたけれども、逮捕されたというので私も大変びっくりしたのです。どうも聞いてみると、私がプロジェクトで書いた絵がもとになって談合事件に発展したらしいので、私としては非常に残念な思いがあったわけです。また、宮城県知事もほぼ同時期に逮捕されたということで、大変残念な事件でございました。

茨城県知事の竹内さんという方は、レジュメにも書いてありますが、元建設省の都市局長をやった大変有能ないわゆる建設官僚だったわけです。この方も実は個人的に知りまして、私が35歳ぐらいのとき、たまたま私の論文を読んでいただいた茨城県の方が私の事務所の六本木までわざわざお見えになって、実は原田さんに県知事の前でご進講してもらいたいという。当時35ぐらいですからこっちはもうびっくりしまして、本当に私ごときでいいのですかなんていうことで、とにかく知事がいろいろな方の話を聞きたいと言っているから、ぜひ若手代表といいますか若い原田さんからの話をしてくれということで、茨城県まで出向きまして、県知事に直接お目にかかって私のいろいろ考えているところをお話ししました。私みたいな若造にまで声をかけて話を聞こうというのだから、すごい知事だなと思っていたのですが、その数年先にこういうことになって、大変お気の毒だったなという思いがあるわけです。

それ以上のところは私の立場では言えませんが、やはりそれなりのいろいろな事情があったと思います。レジュメの3-1の途中に書いてありますが、これは新聞報道の抜粋ですが、前仙台市長の腐敗ぶりはまさに目を覆うばかりで、当時はもう交代していますから、渡った金が2億8,000万近くに上っているという新聞報道がございました。どう考えても、とんでもないことだなと。その後、例えば毎日新聞、読売新聞の社説等を読みましても、入札改革をしろとかいろいろ書いてありますが、残念ながらその後もいろいろな不祥事が続く。

しばらく鳴りを潜めていたら、2006年に3知事逮捕ということで大変残念なことがございました。ちょっとミスプリで、熊本と書いてありますが、これは宮崎県です。レジュメには宮崎と書いてありますが、福島と和歌山と宮崎と3知事が逮捕される事件がございました。さっき国鉄と日本航空の3段階論法というお話をしましたが、このときも3段階論法ではないのですが、いきなりトップが逮捕されることはなくて、まず職員が逮捕され

て、そのとき知事なり市長が「職員が逮捕されてまことに残念である」と最初に新聞報道が出るわけです。次に今度は「私は関係ありません。関係していません」というのが2番目に来る。3回目に逮捕されると「いや、すみませんでした」という3段階で、新聞報道が大体流れていくわけでございます。

ここでちょっと説明させていただくと、このときも結果論ですが、監査委員の活動は効果がなかった。つまり後で触れますし、冒頭もちょっと触れましたけれども、港区で私が積算書をみずから見てチェックしたという話をしました。例えば工事監査で積算書を見て、この積算はちょっとおかしいんじゃないのということを監査委員が言えば、仮に知事なり市長が何か不正をやっているとすれば、ある種の牽制球になったのではないか。あるいはもちろん高い積算書であれば、これ自体問題であることを全監査委員として指摘しなければいけないわけで、そういう意味で、これだけの複数の大物が逮捕されるときに監査委員がどうしていたのかなという思いを、私は感じる次第です。

これは読売新聞に載ったイラストであります。ちょうど2006年に3人の知事が逮捕された直後ぐらいに、談合がどういうものかという、子供向けに新聞にこんなイラストが出ておりました。例えば福島の場合は、これも新聞報道ですけれども、3-2-1の福島のところにいろいろ書いてありますが、入札率が97%だとか、あるいは95%以上だとか。経験的にこのぐらいになると何かおかしいなという感じを、あくまでもこれは推論としてですが、結果論として、証拠がなければどうしようもありませんが、こういう事件の結果からするとそのようなことが類推できるのかなと思うわけです。福島の知事も立派なご経歴の方でしたが、和歌山の方ももともとは東京大学を出ていわゆる自治省のキャリア官僚だった方ですから、当然、端的に言えば不正なんかやってはいけませんということはいくわわっている立場の方のはずです。そういう立場になってしまうと、誘惑だか何かわかりませんが、巻き込まれてしまったわけです。

このときも、宮崎もそうですけれども、やはり部長クラスとか、県だから出納長などが逮捕されたりして、幹部職員からすればいい迷惑ですよ。知事や市長から「これをちょっとやってくれ」と言われて、本当はそんなにやりたくないですよ。だけど、どうしてもやってくれと言われて、ついつい。結局逮捕されて自分の人生がパーになってしまう。そういうところまで被害が及ぶわけでございますので、非常に大きな問題になるわけです。宮崎も同じようなパターンでした。部長たちが捕まり、出納長が捕まりということでした。93年のときに、こういう建設談合問題に大きく火の手が上がって、その後いわゆる入札

改革なんかも一部は進んだのですが、やはり2006年の不祥事を見るとなかなかうまくいっていないということで、公正な公共調達のために、工事監査あるいは積算・入札・契約のチェックを監査の立場でしっかりやらないといけないだろうと思います。

私の友人の話、レジメの3-1の最後のほうに出てくるのですが、このとき防衛施設庁の問題が発生しまして、私の友人がたまたま仙台防衛施設局の局長になっていたのですが、中学校の同級生で、彼が言っていましたけれども、守谷さんですか、防衛次官が逮捕されたときに彼がインタビューを受けて、自分が仙台の防衛施設局長をやっているときに、政治家を含めて14人から口ききを頼まれたと言っておりました。私は彼とは大変親しい関係だったので、いろいろ情報交換していました。非常に彼はまじめな人物であります。余談ですけれども、彼は昔の防衛庁にトップの成績で入って、いずれ防衛次官になるのではないかなと友人としては期待していたのですが、守谷さんが官房長になったときに、官房長は人事を握りますから、彼はまじめ過ぎるということで結局仙台防衛施設局長に飛ばされてしまいました。本来だったら彼が事務次官になってもいいような人柄と能力だったので、そのような友人がそんなことをテレビのインタビューで言っておりました。

今日お配りした資料の最後に、私の書いた読売新聞の論説記事が参考資料として後ろに挟んであると思います。それを見ていただけたらと思います。最後のほうの資料2です。読売新聞の論説記事に、談合の根絶として、外部監査で公正性確保ということで読売新聞から頼まれて書いたのですが、後で読んでいただければと思います。これは、2006年2月ぐらいに書いた論文です。港区で入札改革をやりました。例えば具体的に言うと、港区では予定価格を公表します。それから談合が発覚したら3年間指名停止します。20%の違約金を取ります。そういうことで、多分今でもですが全国で最も厳しいです。私から言わせると、談合をやるならやってみろ、おれがつくった規則にけんかを売るなら売ってみろ、そのかわり談合を見つけたら20%の違約金で3年間指名停止だぞと言って、建設会社から、原田さんは建築事務所をやっているくせに随分建設会社に冷たいとかなり言われたようです。港区で私はそのような制度をやりました。だからどんどんいろいろな自治体もそういうことをやったらいいと思うのですが、聞いている話では、なかなかそこまでやっていないようですけれども、それはそれぞれの自治体のお考えもあると思うのですが。

いろいろなことを論文なりに書いているうちに、今だから言えますけれども、たまたま防衛庁長官の額賀さんが、2月の頭ぐらいで国会開催中ですが、私が昼飯を事務所で1人で食べていました。昼ですから職員がいない。電話がかかってきたから自分で電話に出ま

した。電話で「額賀ですが」と言うのです。珍しい名前でも彼の声を知っていますから、長官だということで、秘書も何も、突然ご本人から電話がかかってきたのです。「原田さんは港区でいろいろ入札改革をされたと伺ったので、ぜひ原田さんのお話を聞きたい。明日かあさってか、お時間はいただけますか」と。当時、防衛施設庁だとか成田空港会社だとか道路公団だとか、もう談合問題で、政府が、当時は民主党が野党で、民主党から質問攻めに遭う寸前だったのです。ぜひお知恵をいただきたいということで、ご本人が直接電話をかけてきたのにもびっくりしたのですが、2日後に直接お会いしました。

国会開催中にSPも秘書も連れずに単身お見えになったのです。だから国会をパッと抜け出したのでしょう。それで1時間ぐらいろいろお話をしました。意見交換というか、港区でこういうことや、ああいうことをやりましたと。いいお知恵をもらいました、政府としてそういう方針で行きますということで、それが2006年2月の半ばぐらいです。それを長官づきの読売新聞の記者が聞きつけて、「原田さん、長官とお話したそうで、ぜひそれを新聞記事に書いていただけないか」ということで、長官も、名前を入れてはまずいわけですが、新聞に書いても構わないと言っていますからということで、この読売新聞の記事になったのです。3月2日でしたか、こうやって書いたわけです。

その頃、2006年3月末ごろ、私が聞いているところだと、当時の竹島という公正取引委員会の委員長と、それから松尾という検事総長が会いまして、つまり談合対策を徹底的にやると政府として意思が固まったということで、直接政府外の機関、外局ですけれども、公取の委員長と検察の総長、検事総長が会って、とにかくこれから談合対策を徹底的にやる、談合は犯罪であると松尾検事総長が宣言をして、徹底的に乗り出した。徹底的に乗り出した結果が、この3人の知事の逮捕につながっていったということです。

私は港区長時代に、さっき言ったように怪しい動きをいろいろ自分でキャッチしたものですから、みずから公正取引委員会に告発いたしました。正式に区長名で、です。そのときに結果的には公正取引委員会から私に電話もないし、事情聴取もないし、私は区長を退任する直前に、竹島さんというか、公正取引委員会の委員長と事務総長に手紙を書きまして、公人たる港区長が公正取引委員会に告発を出しているのに、それを無視して私に事情聴取も意見照会もしないのはけしからんと。そういう態度であれば私が公正取引委員会を告発するぞと、おどしではないのですけれども、本当に手紙を書いたのです。それがきいたのかどうかはわかりませんが、やはり談合は昔の習慣といえば習慣なのですが、犯罪であるということで、政府としても談合の取り締まりを徹底的にやるんだという意思表示を

示しまして、こういう知事の逮捕につながっていったということです。半分裏話みたいなことなのですが、そのようなことです。とにかくこういう不正は絶対あってはいけないということで、監査のお立場でもしっかりと統治して頂く必要があると思います。

今度は港区の話題、事例4でございます。レジュメの9ページあたり、9枚目ぐらいに書いてございますが、さっき冒頭で少し申し上げたことの繰り返しになりますが、港区で私のときに、財政問題の解決が私に与えられた宿題です。私はもちろん先生方のように、税務とか経理、会計のプロでも全くありませんし、小さな事務所を経営してきた程度のこと、あと建築の積算書ぐらい読める程度の知識しかありませんけれども、そういう中で一生懸命財政再建に取り組んだわけです。幾つか自慢話のようになってしまっていますが、事例をお話しさせていただくと、港区はバブル崩壊後、土地の取引は減る、株取引は減る、住民税収入がピーク時の6割まで減ってしまったわけです。ですから行政サービス水準は下げられないからというので、その差額の3割、4割を、全部地方債を発行して借金で賄っていたわけです。私のときに借金返済という、さっき言ったようにニューヨークの二の舞みたいなことになったわけですが、そのときにいろいろ手を打ったわけです。

例えばどういうことだったかということ、区民税の滞納率が23区で一番最後であるということで、税務課長に滞納率を23番目から12番目ぐらいまで上げろとおしりをたたきまして、督励しまして彼に頑張ってもらって実際にそのようになったこと。公共工事は前の区長が契約したのはもちろんやらざるを得ないのですが、私のときは公共工事をゼロにしました。自分ではやりたかったのですが、もうそういう財政事情ではありませんので。それから麻布十番地下公共駐車場の借金返済は160億、当時の富士銀行とか開発銀行から借金をしてつくったバブルの遺産です。それがちょうど私の就任1年前に開業して、大赤字で、その借金返済などがありました。そういうときに監査委員がもっと積極的にいろいろ区政の諸問題について意見を言ってくれと、私自身が非常に身も心も楽だったなという思いを今持っているわけです。さっき言いましたように、だから私は逆にそういうお手伝いをしようということで今やっているわけでございます。

それからレジュメの事例4、港区の問題として4-2の工事契約の問題で、区長みずから積算書をチェックしたということで、本当は監査委員がワンクッション置いて積算書をチェックしなさい、何かおかしいぞと言ってくれと私もやりやすかったのですが、そのときの証拠書類の1つです。私が平成12年、2000年6月に就任したのですが、2000年10月だから3カ月ちょっとですか、施設課長に対して区長コメントとして、

ある施設の積算書がちょっとおかしい、過剰積算になっていないかということで、施設課長とのやりとりの、例えば建具の数が設計図に見比べて多過ぎるとか、私がいろいろ指摘して、そのときのやりとりの証拠書類ですけれども、積算書がちょっとおかしいことがあったり、そういうようなこと。それからあとは、やはり前の区長が発注したある福祉施設です。これが30億の積算が出てきたのですが、私は5億減らせと施設課長に指示をしました。これも自分で積算書をチェックいたしました。今日お配りしたレジユメの資料3に、そのてんまつが出ております。頼まれてこんな原稿を書きましたので、レジユメの資料の一番最後の資料3を後ほど読んでいただければと思います。細かい顛末を書いております。

繰り返しになりますが、レジユメ4-2の工事契約のところ、さっき申し上げたようなことで、公正な契約制度の改革、談合が発覚したら、3年間指名停止するぞ、20%の違約金を取るぞ、それから予定価格を公表するぞ、自由競争だぞ、設計コンサルタントをプロポーザルで選ぶぞということで、そういう制度設計のし直しをしました。

私が退任した後でございますけれども、2006年6月に、港区の区立住宅でエレベーター事故が発生いたしました。これはシンドラーというスイスのエレベーター会社の製品だったのですが、結論的には別にシンドラーは、随分悪者になってしまいましたが悪くはないのです。というのは、メンテナンス契約を年間400万の予定価格だったのですが、それまではシンドラーがずっとやっていたのですけれども、いわゆる独立した一匹オオカミのエレベーターのメンテナンス会社が100万で入札、落札したのです。いわゆる「安かろう悪かろう」入札です。それで警視庁の捜査結果がそのようになっていますから、客観的事実として申し上げますけれども、警視庁の捜査結果としては、書類送検ですが、このエレベーター会社が、社長が1時間かかるメンテナンスを15分で、つまり400万の仕事を100万で取ろうというわけですから、要するに適当にやれと。だからパッと見て、ほこりがついているとか、ロープがすり減っているだとか、そんなものも全然チェックしないで、これはもう、私は別に今の港区に対してどうこうということではないのですが、やはり「安かろう悪かろう」という契約をした港区側に責任がある。それからもちろんメンテナンス会社に責任があるということで、そんな論文を書いたりもしました。警視庁がそういう見解を出していますので、今港区はシンドラーを訴えているようですが、ちょっと筋違いではないかと私はお話ししております。つまりそういう安全にかかわるメンテナンスを400万の予定価格だったのを100万で出すこと自体、逆に危ないぞと。普通それは監査委員が、こんな契約はひょっとして危ないぞ、契約を見直せと言ってあげるぐら

い、ほんとうは監査委員が酌み出して言うべきことだったのではないかなと思います。

余談ばかり増えてしまってだんだん時間がなくなりましたので、早口にしますが、工事監査の話題ということで、今申し上げたようなことです。工事監査の必要性、公正性の確保とか、税金の適切な活用とか、良質な公共施設をつくるということで、工事監査が必要だということです。

さて、波澄局長さんからぜひ震災関係の話をやってくださいということなので資料を用意したのですが、大きくは2つ、ロサンゼルス・ノースリッジ地震が1994年、それからジャワ島沖大地震と大津波が2004年12月です。

94年のたしか1月だったと思います。レジュメには細かく書いてありますが、起こりました。まず結論的に言うと、94年のときのノースリッジは都市直下型ということで、写真がありますが、つまり下からボーンと来て、高速道路の橋板が浮き上がって、また落ちた。それで柱を突き抜けてということで、皆さんもご記憶があると思います。これは、94年1月の朝日新聞の写真をそのまま採用しております。

このときに日本から政府調査団、建設省の土木研究所だとか土木学会、建築学会、いろいろな方が調査に出た報告です。レジュメに書いてありますけれども、このときに道路公団の方が、日本の技術ではちゃんとこういう橋板が落ちないように設計してありますから大丈夫ですというようなことを見解で、公式見解で言っているのですが、ご存じのように翌年、ちょうど1年後、神戸震災で全く同じようなことが、高速道路が破壊、崩れてしまったということです。だからこのときも技術監査の立場から見ると、こういうのを見て、自分の町にある公共施設とか土木構造物は地震に耐えられるのかどうかを検証すべきであるということ、本当はどこの自治体も国も、監査が入ってやると随分違う。「いや、日本では大丈夫ですよ」で終わって、神戸につながったということです。

それからインドネシアのジャワ島沖地震も、2004年12月26日に発生したわけです。約20万人の方が亡くなった。地震が発生してタイのプーケットなどに大津波が発生した大地震だったわけです。このときも当然今言ったように、国交省の土木研究所、建築研究所、それからいろいろな学会が視察に行っているわけです。こういう状態です。これは大津波が発生して、スリランカの逆の海岸のほうまで大津波が発生して届いたということです。こういう事実があります。1カ月たって、これだけの方が、20万人以上の方が亡くなり、行方不明になり、死んだ原因はほとんど津波です。地震よりも津波で亡くなったということです。これは2005年の朝日新聞ですけれども、日本で国内の船が津波被

害ということで、いろいろ過去の実績も出ている。例えば三陸で28.7メートル、あるいは明治で24.4メートルの津波が出ているという事実もあるわけです。そのときに例えばジャワ島沖の地震でこういうことがあったということで、我が町の防災計画は大丈夫なのか、我が国の防災計画は大丈夫なのか、我が県の、我が市の公共施設は大丈夫なのかという検証が、例えば監査委員からされたのかどうかというわけです。

レジュメには書いてありますけれども、テキサス州、私はヒューストン、テキサスにおりましたので、テキサス州の1974年の私が大学で受けた授業のときに、フラッドプレインマネジメントですけれども、要するに100年に1回、洪水とか津波が発生しても大丈夫な土地利用計画をつくりなさいということが出ていまして、そのように建物をつくれという中身になっているのです。それを破ると、当時、1日25ドルの罰金、それから1日留置しますよという罰則があって、そのようにやっています。そういうことを見ると、例えば日本でこの間発生したような事例からすると、防災計画に監査委員の先生方が立ち入って、この想定が大丈夫ですか、想定自体が大丈夫ですか、よく検討しなさいと言っておいてあげるとよかったのかなという思いがいたします。

時間のことがあるので、レジュメは後で読んでいただきたいと思います。

それで1点、レジュメの13ページの上のほうになりますが、ジャワ島沖地震で世界中から義援金が届けられました。その義援金が適切に使われているかどうかを、会計士、税理士の先生はご存じだと思いますが、アメリカの世界的な代表会計事務所のプライスウォーターハウスクーパーズが外部監査をボランティアで、義援金が正しく使われているかどうかを調べに行ったことが新聞報道されています。例えばそういう防災計画をチェックするのも監査委員の先生に課された課題だし、実際に災害が発生したときに義援金が正しく使われているかどうかをチェックするのも先生方のお仕事だし、今東日本で、県レベル、あるいは市レベルまでか知りませんが、500億円、日本中から世界中から集まった義援金がまだ金庫の中に入っているというのです。とにかく身ぐるみ、家は壊され、荷物は全部流され、何とか命からがら逃げた方が、例えば服もどうするのか。いろいろなものが必要ですよね。そういう方たちに、どんどんお金を渡さないといけないわけですが、500億円まだため込んでいると言っては失礼かもしれませんが、まだ残っているということで、何とかしないとけない。これも例えば監査委員の先生が、500億ため込んでいるのはおかしい、早く配れと言うと命令になってしまいますから、おかしいという指摘を、岩手、宮城、福島あたりの県の監査委員が言っているのだから言っていないのか知りま



せんけれども、どうしてたまってしまっているのかなということです。

最後にお話をさせていただきますけれども、監査委員、監査役、何をしてきたか。これは駅伝のようにたすきを正しくつなぐという役割がある。それから当該市長の引退後、後継市長が苦しむ、あるいは社長ですね。それから問題期の監査委員の活動が効果はなかった。監査委員も首長と同程度、あるいは場合によってはそれ以上に責任があると私は思っております。最後、短いお話をさせていただきますと、都市政策と監査活動の使命ということで、大局観で過去の事例を学んで、監査が未来をつくるということ、それから監査は結局10年、20年、30年たった未来から評価される。あのときの社長、首長は偉かった、同時にあのときの監査委員は立派だったね、だから今いい町が続いているんだね、いい会社が続いているんだねということだと思います。

そういう意味で監査委員の先生方のお仕事、あるいは監査そのものが、私は大きな役割を果たしていると思っております。これから監査委員の先生方、ますますのご活躍とご健闘をお祈り申し上げ、私のつたないお話ですけれども終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）